

ブッダゴーサ作品の文献学的研究

馬場 紀 寿

東京大学東洋文化研究所 准教授

緒 言

スリランカと東南アジア大陸部に広まる上座部仏教は、これらの地域の文化形成に極めて重要な役割を果たしてきた。シンハラ語、ビルマ語、タイ語、ラオ語、カンボジア語には上座部仏教の聖典語であるパーリ語から大量の語彙・概念が継承されているという一点を見ただけでも、この地域の文化が上座部仏教を抜きにして語れないことが分かる。そこで、本研究は、上座部仏教の特質を明らかにするために、上座部仏教の基本思想を確立した学僧、ブッダゴーサ（五世紀前半、スリランカ）の作品を文献学的研究に基づいて再検討する。

研究方法

森（1984）が明らかにしたように、ブッダゴーサは自らの作品において大量の源泉資料を引用している。ブッダゴーサの思想的特徴を知るためには、単にその作品を読むだけではなく、どの箇所が源泉資料に由来するかを解明し、それに対してブッダゴーサが行った編集作業を分析してはじめて彼の独自の思想を知ることができる。そこで、本研究では、ブッダゴーサの源泉資料に対する編集作業を分析し、その内容を上座部の歴史上に位置づけることによって、ブッダゴーサの思想的貢献を明らかにする。本研究によって明らかになったブッダゴーサの歴史的位位置は以下のようにまとめられる。

結 果

歴史上、最初に「上座部」という呼称が登場する文献は、スリランカの史書、『島史（*Dīpavamsa*）』である。『島史』は、仏滅後間もなく開かれた第一結集における、阿羅漢に達した「五百人の上座（長老）たちによる法と律の集約（結集）」が「上座説（*Theravāda*）と呼ばれる」と述べ、上座説を伝承する上座部（*Theravāda*）から大衆部や説一切有部などの諸部派が分裂したと説明する。「上座部」を名乗ったスリランカの仏教は、諸部派の中であって、

第一結集による正統な仏説の継承者として自らを位置づけたのである。

インド東岸、クリシュナ河沿いにあるナーガールジュナコンダには、スリランカの上座部または上座部大寺派に属する寺院の存在を示す三、四世紀の碑文があるから、この時期には、スリランカの上座部がインド本土に進出していた。インド本土で栄えた説一切有部などの部派が考古資料や写本に登場するのは一、二世紀なのに対し、上座部はやや遅れて三、四世紀にまで下るから、おそらくこの後発の部派が、仏教発祥の地から見れば辺境の地であるスリランカからインド本土へ進出した際に、自らの正統性を主張するため、上座部は第一結集の仏説に由来すると主張し始めたのであろう。

『島史』は、ブッダについては生前にスリランカに來訪したと述べ、第三結集にかんしては、山崎（1979）が指摘したように、西インドで活躍していた高僧、モッガリプッタ・ティッサをアショーカ王の師とし、スリランカに仏教をもたらしたマヒンダにかんしては、モッガリプッタ・ティッサの弟子となったアショーカ王の王子として描いている。上座部は自らが仏教の正統であることを広めるために、インド本土の諸権威（ブッダ、アショーカ王、モッガリプッタ・ティッサ）とスリランカとを結びつけた歴史を巧みに作り上げ、上座部を仏教の正統としたのである。

このような状況にあって、上座部大寺派の学僧、ブッダゴーサは、四三〇年前後に、スリランカで『清浄道論』や四ニカーヤに対する注釈文献を編纂した。彼は「すべてのブッダの言葉」を定義してパーリ三蔵の構成を明示し、その中に入らない經典を「非仏説」として否定した。構成と範囲が規定された文献の一覧表という意味での正典が上座部大寺派に確立したのは、この時である。

ブッダゴーサ作品の序文によると、彼がスリランカへ来る以前に南インド東岸の諸地域に滞在していた。三、四世紀には南インドに上座部大寺派の拠点があったこと

を踏まえれば、ブッダゴーサもそうした南インドの拠点の一つで過ごしており、大寺派のネットワークを辿って、スリランカに渡ってきたと考えられる。ブッダゴーサに続いて註釈文献を著したブッダダッタやダンマパーラは、大寺派の伝統に属しつつも、インドで執筆活動を行った。註釈家たちの活動場所からも、上座部大寺派がスリランカを本拠地としつつインド本土（とくに南インドの東岸）に展開していたことが分かる。

Shimoda (2009) によれば、大乘は一つの起源から生まれて拡散・展開したのではなく、すでに拡散して存在していた大乘が、アサンガ（無着）やヴァスバンドゥ（世親）らの活躍した四、五世紀以降、大乘に対する理念的弁明が表面化し、大乘が固有名詞として理解され、その本質を規定し運動を単一化していくようになった。ブッダゴーサは「大乘」という言葉に触れないから、固有名詞としての「大乘」を知らなかったか、意図的に用いなかったのだろう。しかし、ブッダゴーサはパーリ三蔵に収録されていない数々の仏典を非仏説と呼んでいるから、仏典が多様に発生した状況を認識していたと考えてよい。しかも、非仏説のリストには大乘を指す語が冠せられたヴェートウツラ蔵（ヴェータウツラ蔵）が含まれているから、ブッダゴーサがある種の大乗仏典を念頭に置いて批判していた可能性が高い。正典化を確立した上座部大寺派は、仏典が多様に拡散・展開していた南アジアにあって、他系統の仏典を斥ける方向へ舵を切ったのである。

要約

スリランカの仏教が「上座部」を標榜して、仏教諸

派の中で仏説の直系であることを主張し始めた時期に、ブッダゴーサが三蔵の構成と範囲を確定し、仏説と非仏説の境界が明確となった。その結果、上座部大寺派は大乗仏典を仏説として認めず、それを斥けた。七世紀から九世紀にわたって、スリランカでは大乗仏教が繁栄していたが、上座部大寺派はそれと対立する立場に立ち続けた。この反大乘の上座部が十二世紀以降、スリランカの仏教界を独占したために、スリランカから仏教を輸入した東南アジア大陸部においても大乘を斥ける上座部が主要な宗教となった。

本研究の成果の一部は、拙稿「上座部仏教と大乘仏教」(『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教の誕生』, 東京: 春秋社, pp.140-71, 2011年) として発表された。

謝辞

本研究を遂行するにあたって、公益財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 静谷正雄：小乗仏教史の研究—部派仏教の成立と変遷—, 百華苑, 1978.
- 2) 馬場紀寿：上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴーサへ, 春秋社, 2006.
- 3) 森 祖道：パーリ仏教註釈文献の研究—アッタカターの上座部的様相—, 山喜房佛書林, 1984.
- 4) 山崎元一：アショーカ王伝説の研究, 春秋社, 1979.
- 5) M. Shimoda: “The State of Research on Mahāyāna Buddhism: The Mahāyāna as Seen in Developments in the Study of Mahāyāna Buddhism”, *Acta Asiatica* 96, pp.1-23, 2009.